

『甲午筆乘』記載の医書と医学について

木場由衣登

日本鍼灸研究会

『甲午筆乘』は、『黄帝内経太素』の伝写に貢献した塚原修節の日記である。武田科学振興財団杏雨書屋（乾々斎文庫477）に所蔵され、天保五年（1834）の正月朔日から九月四日の出来事を記載する巻二十六から巻二十八のみを抜粋した手稿本である。表紙は錆浅葱で、縦20mm、横14mm、全62丁、扉には「新修本草筆写史料」と副題が附され、書題の「甲午筆乘」に下に「塚原修節筆」と記され、「杏雨書屋」と「藤浪氏蔵」の蔵書印がある。扉の裏には、書き入れが附されており、「京都御室仁和寺蔵『太素経』『新修本草』『医心方』（共ニ皆今ハ国宝ナリ）影写に關スル塚原修節自筆ノ日記ナリ。浅井家々譜大成及名古屋市史ニ記ス所又一般世ニ傳フル処ト異ル点多シ。識者ノ研究スベキ大切ノ資料ナリ、注意シテ保存アリタシ〔半右記ス〕」とあり、続きに「雑誌『紙魚』第十八冊に「太素経ノ写本」ト云ウ大口全三郎氏ノ記事アリ参照セヨ。浅井家ハ尾張医家ノ棟梁ナリ今絶ヘタリ」と記載される。塚原修節の出自についても記載され、これによると「塚原堂圃、名ハ温、字士玉、号青牛斎、通称清昇、美濃武儀郡下有知ノ人、汝水（名雅草、字士達）ノ子」であるという。本書は約180年前の塚原修節の日常が雑然と著されており、当時の医学を知る上で様々な重要な記載が含まれる。中でも重要なのが、『黄帝内経太素』『新修本草』『医心方』の伝写についての記載である。正月八日（七日）に東道策、浅井氏、高嶋氏より旧鈔本が「出現」した為に修節は転写の為に上京するが、その足跡について、以下に関する事項を挙げる。

二月十七日「訪横井、小笠原氏抵浅井氏謀『医心方』影模事」、十八日「入小森典葉殿門東氏介紹引余問話、及『医心方』『太素』之事。」

三月四日「開晴、昨雨变暖、浴姉小路東湯見東氏所蔵諸家伝書数書目云」とあり、東氏所蔵の『蕉窓雜話』『癆瘵口訣』『灸穴図説』等多数を閲覧している。

四月十一日「『新修本草』五卷自仁和寺来。夜来援筆筆影膳」、十二日「写本草」、十八日「『新修』第四終」、廿七日「『新修』第十二～第十七初」、廿九日「『本草』十七軸了。」

五月五日「『新修本草』第十九了」、八日「英山来訪云『太素』要蔵浅氏ニテ二部写シ歸リ鬻クト」、十六日「御室公『太素』来并『医心方』校合、期十九日終日、調紙終不成。○夜、調『医心方』外題。（太医署所蔵）」、十九日「太医令祇仁和寺登殿初拜『医心方』……第一卷了原本八十葉」、廿日「第六七五（半卷）了」、廿一日「把筆於『太素』写二葉」、廿二日「御室殿上校三卷入夜歸」、廿四日「御室閣中校『医心方』二卷余日映歸館」、廿六日「早出抵一御室校正『医心方』二冊、陰后晴映后歸」、廿八日「微雨苦熱初覚、夏色午後東氏来助校合正廿二帖、余影写二葉、此日校正全畢。收笈暮前歸。」

六月三日「雨。書写『太素』第九、二十二頁畢」、五日「蒸熱。校『医心方』。医心館所蔵也」、十四日「校『医心方』三卷。」

七月七日「太医令家蔵『太素』影写殆」、廿日「『太素』第三。膳写、校正、移点了。包束呈了」、廿二日「『医心方』移点始ム。」

上記より修節が手写した『太素』は巻三と巻九であり、校正、移点までが完了したのは、七月廿日であり、それまでに『医心方』と『新修本草』は校正まで終了している。

記載される医学に関しては薬方が多く、三月念一日には、「癆虫」「伝尸」「癩癩」に対する薬方、符方、診察法（「背心観法」）について記載している。また修節は医心館にて、『傷寒論』（四月廿日他）や『難経』（四月十一日）の講義を受けている。また、本書には鍼治療についての記載が見られ、五月朔「夜診、小林氏北堂〔鷹司公太夫也〕施針治」、七月廿四日「長尾氏癉腹痛、針摩」とあり、鍼治療を行っていた様子がある。

本書は、旧鈔本が転写された当時の様子だけでなく、その時代の医学そのものを伝える重要な史料である。